

機関研究「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」

みんなくセミナー

暮らしの中の言語学「ことばの機能障害と言語学」

日時：2013年12月1日(日)13:00~17:00

場所：日本財団ホール(東京)

主催：国立民族学博物館

企画：菊澤律子(国立民族学博物館)

助成・協力：公益財団法人 日本財団

2004年、聴覚障害者である手話話者が、交通事故により、利き手の変形および機能障害を負った。現在の日本の法律では、言語に関する障害等級認定基準は音声言語のみが対象となっており、手話言語について詳細を定めたものがない。裁判所では、これが言語障害であることを認めたものの、その度合いについては「意思疎通が可能かどうか、手話能力がどの程度失われているのかを中心に個別的に判断するのが相当」との判断となった。

セミナーでは、原大介(豊田工業大学)が「交通事故手話裁判と手話言語学」と題し、事実関係や背景、また関連する基本事項に対する自らの視点についての講演をおこなった。これをうけて、手話言語学(市田泰弘/国立障害者リハビリテーションセンター学院、国立民族学博物館)、音声言語学(那須川訓也/東北学院大学)、言語聴覚療法学(藤原百合/聖隷クリストファー大学)、法律(藪之内寛/弁護士法人サリュ大宮事務所)など、各分野の専門家がさまざまな視点から報告し、活発な討論がなされた。

多角的な視点から、障害者等級認定基準に取り上げられている音声言語のひとつひとつの特徴が手話言語においては何に相当するのか、学術的な考察をおこなうことができた。



機関研究「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」

公開フォーラム

「負の文化遺産の保存と展示をめぐって」

日時：2014年1月18日(土)13:00~19:00

場所：千里朝日阪急ビル第1会議室

共催：国立民族学博物館・総合研究大学院

大学学融合プロジェクト

企画：竹沢尚一郎(国立民族学博物館)

「負の文化遺産」とは、戦争や震災などの社会的破局が生じた後に残され、多くの人びとに負の記憶を与えるものである。このフォーラムでは、広島原爆ドームが保存されるに至った歴史的経緯と、地域社会に葛藤を生みつつある東日本大震災の遺構について、ゲストを招いて発表と討論をおこなった。

広島原爆ドームが残された背景として、広島が軍都から平和記念都市に脱皮をはたす時間が経過するまで放置され、建築物としての損傷も受けなかったことがあげられる。長い年月を経て、当事者が負の記憶を語ろうとしてはじめて、多くの偶然によって残った遺構がようやく「遺産」とみなされはじめた。

東日本大震災の遺構については、当事者が冷静に歴史をふり返るほどにじゅうぶん時機が熟していない。そのいっぽう、遺構撤去のための補助金執行には期限があり、行政は早急な決断を迫られている。さらには、被災者個人の精神的負担に配慮するというより、震災時の対応の遅れを忘れさせようとする意図も見え隠れする。こうしたなかで、遺構を遺産として後世に伝えるためには、被災者へのじゅうぶんな配慮が必要である。

総合討論では、遺構をモノメントとみなす発想が普遍的でない指摘されるいっぽう、自然や武器の破壊力を体感させるかけがえのない存在であるとも論じられた。また震災に関しては、遺構保存の先にどのような文化伝承が可能か、そのために遺構がどう位置づけられるかが議論され、語り部をまじえたフォーラムの中心となる可能性などが示唆された。

機関研究「ケアと育みの人類学」

国際シンポジウム

Social Movements and the Production of Knowledge: Politics, Identity and Social Change in East Asia

日時：2014年2月22日(土)10:30~16:40

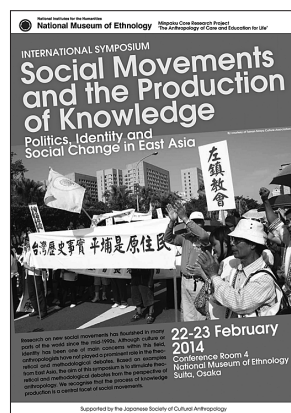
2月23日(日)10:30~16:40

場所：国立民族学博物館 第4セミナー室

主催：国立民族学博物館

後援：日本文化人類学会

企画：平井京之介(国立民族学博物館)



社会運動は包摂と自律の社会的メカニズムを考えるうえで、重要な構成要素のひとつである。1990年代半ば以降、ラテンアメリカや欧米を中心に、社会運動研究が盛んになり、文化やアイデンティティが主要なテーマになってきたにもかかわらず、人類学は目立った理論的、方法論的貢献を果たしてこなかった。東アジアにおいては、近年、社会運動が盛んになっているものの、人類学的な社会運動研究はまだ萌芽的な段階にあり、またその研究は各国別におこなわれてきたただけであった。

このようななか、韓国、台湾、日本の社会運動研究に携わる人類学者が集まり、初めての対話となる本シンポジウムが開催された。ここでは、東アジアの社会運動を、知識や実践、アイデンティティの生産の媒体としてみるとともに、国家統治や資本主義の拡大によって生じた矛盾に抵抗する幅広い形態の集積的実践を運動としてとらえた。そして、認知的な知識だけでなく、非言語的ないし暗黙的な知識や実践の様式、記憶、情動などがそこで生成され伝達される過程を研究の対象としていくことによって、社会運動の人類学的研究という新しい研究領域を展望することができた。